

『シャロットの女』殺人事件

佐藤 雄紀

# 『シャロットの女』殺人事件

佐藤 雄紀

序章 事件の始まり 4

一 事件が起きるまで 7

出発 7

老人と少年 8

馬上槍試合 13

毒りんご事件 16  
帰路 20  
王の帰還 23  
罪 25  
事件 27  
真実 30

二 シャロットの女 32

退屈な日常 32

過ち 37

別れ 39

旅立ち 40

## 序章 事件の始まり

この日、早朝から季節外れの雨雲が低く立ちこめ、嵐の到来を告げる雷鳴をどろろかせていた。まるでこれから起きる事件を不吉にうらなうかのような空模様である。荒れた天気のため、キャメロットの人々は外出を控え家や城内の集会所で嵐が過ぎるのを待ちながらじっと過ごしていた。

そして日が暮れはじめる頃、奇妙な現象が起きた。それまで雨風の音で騒々しかった外の様子が、一変して静まり返ったのである。騒音と引きかえに聞こえてきたのは女性の歌声だった。

歌声がだんだんとか細くなり、ついには誰の耳にも聞こえなくなったとき、一艘の小舟が城内に入って波止場へ流れ着いてきた。若い騎士見習いの少年が偶然にもその瞬間に立ち会った。

はじめ無人かと思われたが、よく見ると小舟の中に鮮やかな布が見えた。その中に横たわっているのが一人の少女だと、彼がようやく気づいたのはその現場に集まった周り

の人々が騒ぎ始めたときだった。その少女はまるで全身の血を抜かれてしまったかのよう蒼ざめた態だったが、その場に居合わせた人の誰もが息を吞んでしまうくらいまだあどけない少女の美しさだけが残されていた。

呆然と立ち尽くすばかりの騎士見習いだったが、急に背を向けてどこかへ消えていった。

一方でそこに近づいてくる二つの影があった。影の主に気が付いた小舟の周りに集まる人々は水面を波が伝わっていくかのように身を引き、小舟へと通ずる一本道が出来上がった。一人は小舟へと近づいていき、もう一人は途中で足をとめた。波止場に設けられた松明の灯りでその顔が照らされ、その影の正体が人々の目に明らかになった。「どうして、あの方たちがこのような場所にいるのだろう。」と集まる人々はおのおの驚きに満ちた表情をしている。

美しき少女の亡き骸を熱いまなざしで見つめているのはランスロット卿、そしてその二人の様子をじっと黙って眺めているのはアーサー王である。

周りの騎士たちが恐怖から十字を切りはじめる中、ランスロット卿は横たわる少女の胸の上に組まれた白く細い指を見た。すると指の間には手紙がはさまれていた。

その手紙を開き、内容を確認するとそのまま小舟のへさきに目をやった。そこには何か文字が刻まれているようだった。

そして何かの意思を受け取ったかのようにしばし瞑想し、こうつぶやいた。

「……神よ、今は亡き美しき少女の御霊に慈悲を垂れたまえ。」

後に人々に語り継がれることになるその少女は小舟のへさきに刻まれた文字からこう呼ばれることになる。

——『シャロットの女』と。

## 一 事件が起きるまで

### 出発

日が沈み、ぼつりぼつりと小さな星が空にあらわれ始めた。テムズ川を臨める土地に悠然とそびえるキャメロット城はいつもの活気を失い、ただひっそりとした静寂のみが広がっていた。城の最上部に位置する王妃の暮らす部屋だけが明るく灯されていた。この場所から北方に位置するウィンチェスターで開かれる馬上槍試合に出るため、城にいるほとんどの騎士がアーサー王を含め朝のうちに出発しており、城内に残っているのは使いの者をのぞけばグイネヴィアとランスロットだけであった。

部屋に残ったグイネヴィアはどこか落ち着かない様子で人を待っていた。

「グイネヴィア！」部屋を仕切る垂れ幕の奥から優しく、力強い男の声があった。

「……ランスロット、よく来てくれました。」一瞬の間があり、呼びかけられたグイネヴィアは答えた。

「すこし、待たせてしまったかな。」

「いいえ。本当に、もう行ってしまおうのですか？」グィネヴィアは言う。

「ああ、君とここに残ることも考えたがやはり行かなくてはならないようだ。君には理解がたいかもしれないが、騎士として、いや男としてのけじめをつけなくてはならないんだ。」彼の目にもう迷いはなく、言い終えると一心にグィネヴィアを見つめていた。

「そうですね、だけどこれだけは約束して下さい。必ず無事に帰ってくるよ。」グィネヴィアはランスロットに寄り添うように言った。

「ああ、必ず帰ってくる。……この愛が続く限り、約束するよ。」

グィネヴィアはランスロットからの熱い抱擁を受け、軽い口づけをしてランスロットの旅立ちを見送った。

## 老人と少年

馬上槍試合開催の地ウィンチェスターへと向かい始めて三日くらい経過しただろうか。ランスロットはようやく目的地まで半分のところまで一人馬に跨り進んでいた。そ

の道中、自分が試合でアーサー王の側につくか、それとも敵対する側につくかずっと考えあぐねていた。

馬上槍試合は相対する騎士の軍勢が向かい合って互いの剣技や馬術を見せ合い、強さを競い合うものであった。ときには死者も出るくらい危険な競技である。だが、騎士にとってその戦いで勝利が与える栄誉は表現しようのないくらい重要なものであった。

しかし最近ではアーサー王に敵対する不穏分子が力をつけ始め、アーサー軍を脅かしつつあった。自らの立場を考えるとできれば騎士団の内部分裂だけは避けなくてはならない。そのためにはどちらの軍にも属さずに槍試合に参加する必要がある。何か、うまく方法は無いものかと馬に跨りながら延々と考えているのであった。

ランスロットがテムズ川の流れに沿って進んでいくと、こちらの土地では珍しい一軒の大きな屋敷が見えてきた。食糧も底を尽き始めていたので屋敷の主に事情を話して援助してもらえるよう頼むことにした。何か槍試合のヒントとなるものも見つかるとも思えない。

屋敷の玄関で呼び掛けると中から小柄な老人がでてきた。

「旅の途中なのだが、今晚ここに泊めてもらえないだろうか？」とランスロットは言う。

「この先、夜になると道も見えなくなり危険です。何もおもてなしできないが、それ

でも良ければ泊っていきなさい。」と老人は親切に答えてくれた。

屋敷に招き入れてくれた老人に礼を述べると、そのまま中に入った。すると中には老人のほかにも一人の少年がいた。自分よりも十才は若くおそらくは二十一、二才くらいの年齢だろう。だがその割にとっても賢そうな精悍な顔をしていた。

「旅のお方、まだ名前を伺っていませんでしたな。名はなんと言うのですか？」老人は部屋を案内しながらランスロットに尋ねた。

「『湖を愛する騎士』とだけ言っておきます。訳あって今は名乗ることができないのです。」

「そうでしたか。……では、湖の騎士殿とお呼びしましょう。せっかくですからここで暮らす私の家族を紹介しましょう。」少しの間があったところを見ると老人は事情を察してくれたらしい。

そういって老人は目の前にいる少年を指さしながら紹介し始めた。見た目に凛々しく澆刺そうな少年はラヴェインというらしい。

「騎士のお兄さん、僕も槍試合につれていってくれないかな。これからランチェスターへ行くんでしょ？」少年はランスロットに近づいてきて言った。

「ああ、そうだ。君の言うとおりこれから私は槍試合に出なくてはならない。しかし、残念だが君を連れていくことはできない。」

そう言い残すとランスロットは用意された部屋にいき、荷物をおろし簡単に身支度を整え旅で疲れた体を休めるために早くベッドに入った。しかしなかなか眠りにつくことができない。ここ数日、自らの騎士団での立場をずっと考えていたが、一番にアーサーを信頼した、他の騎士からの信頼も厚いという自覚はあったがアーサーは自分のことをいったいどう思っているのだろうか。彼の妻であるグイネヴィアと恋仲になってしまったことを彼にいつか知られてしまうのではないか。いやもう知っているかもしれない。そのことを考えると自分はアーサーを信頼しているといいながら心の奥深いところでは邪魔で憎らしい存在だと思っただけではないか。目を閉じると余計な事ばかり考えてしまい、とても眠れる状態ではなかった。

槍試合はアーサーに対する態度を示す最後のチャンスである。それならいっそのこと禁忌を犯してしまった自分への戒めとして、変装した姿で戦上に立ち本来味方である仲間間の騎士たちの攻撃を一身に受けるというのも悪くはないかとも思い始めていた。それで死ぬのなら騎士らしく逝ける。

すると、ドアの奥に人の気配を感じた。あきらかに老人と少年のそれではなかった。この屋敷にはまだ他にも人がいるようだった。

向こうはこちらの様子をただうかがっているようで声をかけることはない。こちらから、声をかけて反応を確かめようとも思ったが別に危害を加えようという感じでもない

のでそのまま何もしないことにして眠ることにした。

数時間が経ち、空の色に白みがようやくやくさし始めた。ランスロットは朝早いうちに出発しようとしていたが、不意に後ろから声をかけられた。振り返ると少年が旅の格好に着替えた姿で後ろに立っていた。

「騎士のお兄さん、やっぱり僕も連れていってくれないかな！ ね、お願い。」少年はランスロットに駆け寄ってきて言った。

「湖の騎士殿、私からもお願いできないか。息子にもそろそろ騎士としての経験を積ませてやりたいと思っていたところなんだ。」と言って奥の部屋から出てきたのは老人である。

「少年、たしか名をラヴェインといったな。君の思っているよりも旅というものは過酷だぞ。それに私の旅には危険が常に付きまとうがそれでもついてくるか？」

「そんなの、望むところさ。死ぬのが怖くて騎士になんかなれるもんか。」少年は大きな目を輝かせながら強く言った。

「そうか。……その心意気、よし君が気に入った。すぐに出発するぞ。」

「湖の騎士殿、一つわしの頼みを聞いてもらえないか。」と老人は言った。

「頼みとは何でしょうか。」

「これをあなたに身につけてもらいたいのです。」とって老人が手にとったのは古び

た鉄製の兜と甲冑そして色鮮やかな糸で紡がれた布で装飾された深紅の楯だった。

「これらをなぜ私に？」

「名乗ることのできない事情を察するに、今のままの格好では正体が他の者にすぐに分かってしまうのではないかね。それに『湖を愛する騎士』と聞いてわしは、あなたが気高い勇敢な騎士に違いないと分かった。ちと古いものだが戦闘では十分役に立つてくれるだろう。」老人はランスロットに一式を手渡して言った。

「ご老人、このご恩は一生忘れない。ありがとう。」

「息子をよろしく頼みます。」とって老人は深々と頭を下げた。

こうして年若い少年を旅の供とすることに決めたランスロットはラヴェインと共に老人に見送られながらランスロスターへと向かうのであった。

## 馬上槍試合

アーサー王はウィンチェスターで開かれた馬上槍試合の会場に自らも騎士として参加していた。試合はまずアーサー軍とそれに敵対する側に分かれて向かい合い、互いに相手を見定めることで始まった。自らも戦場に立つアーサーは、率いる騎士たちの戦いぶ

りをつぶさに観察していた。するとはじめは優勢だった自軍の騎士たちがだんだんと敵に押され始め情勢はやや劣勢のようにみえる。

自軍の騎士たちの様子を見ているとどこか統率がとれずにバラバラに戦っているようだった。そこが弱点となって普段の戦いぶりを発揮できていないようであった。

——ランスロットがいけないというだけでこうも戦況が違ってくるものなのか。

アーサーは心からランスロットの不在を嘆いていた。

ランスロットといえば、妙なうわさを聞いたことがあった。我が妻であるグイネヴィアと恋仲になっていくというのだ。それを聞いた後でグイネヴィアに直接尋ねてみようかとも思ったが一番の信頼する騎士であるランスロットがそのような裏切りをするはずはないと考え、やめた。それに最近の騎士団内の状況を考えるとやはりうわさのままに留めておく方が無難なのではないかという思いもあった。そのようなことで自ら騎士団を分裂させてしまう事態だけは何としても避けねばならない。アーサーは王としての立場と夫としての立場で揺れ判断することを決めかねていた。

ただひとつ気がかりだったのは、この馬上槍試合にランスロットが参加せずにキャメロット城に残っているということだ。

「いかん、試合中にこんなことを考えている場合ではない。」と言い捨てると、アーサーは雑念を振り払い目の前の戦いに集中することにした。

そんな中、気になる動きを見せる一人の騎士がいた。よく見るとどちらの軍の味方とも読み取れる行動をとっているのだ。例えばわがアーサー軍の騎士が敵の騎士を追い詰めて、とどめを刺そうとすればそれを巧みな剣さばきで食い止め、そのまま反撃するのかもしれない、馬を反転させまたすぐに別の騎士のもとへ駆け寄りその援護をしているのである。まるで自らへの戒めを受けるかのように必死に抵抗をして両軍の攻撃を受け止めていた。

見慣れぬ深紅の武具を身にとっているその騎士の戦い方はどこかランスロットを彷彿とさせる。その楯には極彩色の装飾が施されていてどこか女性的であった。普通、こういった戦いの場では装飾した武具を持つ者は珍しく、彼の華麗な馬さばきがよりいっそう謎の騎士の動きを際立たせていた。

しかし、あの謎の騎士がランスロットだったとしてどうして我がアーサー軍として戦っていないのだろうか。彼の戦いの動きはまるでどちらの軍にも属さない中立的な立場であるということを私に向かって懸命に意思表示しているようではないか。一体私に何を伝えようと必死に戦っているのだろうか。先ほど考えていたグイネヴィアとの噂のことが関係しているのだろうか。アーサーは直感的に思った。

試合が終わりに近づいてきた頃、ほとんどの騎士たちは疲弊しきっていたがその中でもまだ動きに衰えを見せないあの謎の騎士に我が軍でも五本の指に入るつわものたちが



一斉に襲いかかった。

謎の騎士はその動きを一人二人とかわしていくが一瞬のすきに剣が振り下ろされ、頭とわき腹を切りつけられる。腹からは血が噴き出し、それまで顔を覆っていた兜が破損し脱げ落ちた。遠く離れていたアーサーからは顔までは判別できなかったが、その艶のある黒髪の持ち主はランスロットに間違いはなかった。

「なんということだ。やはりお前だったか、ランスロット。」とアーサーは声なくつぶやいた。

攻撃をした我が軍の者もその謎の騎士の正体を知り、その手がひるんだ。そこを見逃さなかったランスロットは踵を返し手綱を思い切り引っ張り試合場を背にして去って行った。

## 毒りんご事件

グィネヴィアは愛するランスロットの帰りを城で待ちわびていた。しかし、立場上はアーサー王の妻としてふるまわなくてはならない。それが逆に彼女にとってランスロットへの想いをいっそう募らせていた。恋というものにはきつと障害がつきものなのだろう。

う。障害があればあるだけ気持ちだけは近づこうとしたくなる。本気の恋をしたことがある者にしか分からない葛藤だ。

「王妃、あなた宛ての手紙を預かっております。」と使いの老女の声。

「ありがとうございます。誰からかしら。」グィネヴィアは手紙を受け取りながら言った。

老女は手紙を手渡すとすぐに部屋の奥へ消えていった。大抵グィネヴィア宛ての手紙には内密にしなければならぬ内容のことが多く、それを察してくれたのだろう。

手紙を開くとアーサーからのものだった。その内容は先日行われたランチェスターでの馬上槍試合についてのものである。

「きつと今回の槍試合でも愛するランスロットの活躍で勝利したのだろう。」と期待しながら王直筆の文面をたどっていくと意外にもアーサー軍は勝利をしたものの予期せぬ敵に苦戦を強いられる結果になったという。そしてグィネヴィアはその文章に気になる単語を見つけた。

『謎の騎士』……?』

文面から読み取れたのは、深紅の見慣れぬ武具を身に付けた謎の騎士の活躍によってアーサー軍だけでなく敵の軍の多くの騎士が倒されたという。そのためアーサー軍は不意を突かれて戦況を悪いものにしてしまったらしい。続けてグィネヴィアの興味を引いたのは、その謎の騎士の戦いぶりにアーサーは見覚えがあったという。

「我が夫を追い詰めた謎の騎士とは一体誰なの、まさか……」

その時グイネヴィアの頭をよぎったのは戦場で勇敢に戦うランスロットの姿であった。しかし、アーサーと敵対する立場で戦うことなど決してあってはならないことである。それに、深紅の楯などという女性的な姿で戦場に立つランスロットなど想像できない。きっと思い過ごしだろうと思いたかったグイネヴィアだったが、直感的に自分の周りで様々な思惑が動き始めているように感じていた。

この日、キャメロットではグイネヴィアが主催する宴会が開かれる予定だった。宮廷に諸国の王族を集めて酒を飲み交わしながら、食事をして親睦を深めようというものである。ここしばらく宴会の準備に追われていたグイネヴィアは手紙の事は忘れて、さきほどの考えは杞憂だと思ふことにした。

日が暮れて、招かれた者たちが会場に集い宴会が始まった。

宴会場ではまず円卓を皆で取り囲み、それぞれの杯に葡萄酒が注がれた。

「今日は皆さま、宮廷での宴会に集まってくいただきありがとうございます。」と一言挨拶をして、終わると皆一斉に酒を飲み始め宴会が始まった。その後はそれぞれが歓談を始めて国や家族について語り合うのがいつもの流れであった。

時が経ち、グイネヴィアは国の特産品として用意していたりんごがあることを使いの者から聞いていたので、この機会に歓迎のしるしとして会場の席で皆に振る舞おうと思った。グイネヴィアは近くの者を呼び、りんごの入ったかごを持ってこさせそれを皆に配るように言った。それにこたえたのはいつもの使いの老女ではなく、見慣れぬ若い女であったがこの時は特に気に留めることはなかった。

そしてりんごが皆のもとにいき渡ったのを確認すると、グイネヴィアの挨拶のもと一斉に一口、二口と食べ始めた。

すると、一人の男が喉を押さえて倒れこんだ。うずくまり苦しい動きを見せていたが次第に痙攣し始めてしまいはびくりとも動かなくなってしまった。

周りは騒然とした。

「皆の者、落ち着いてください！」グイネヴィアは言いながら慌ててその男のもとに駆け付けた。

脈に触れたがもう息をしていない。

「王妃が、毒りんごで人殺しをしたぞ！」誰かが声を上げたのが聞こえる。

周りの者たちも何が起きたか分からず立ち尽くしていたが、その声をきっかけにしてグイネヴィアに一斉に視線が集まった。

「なぜ、こんなことになってしまったの……」とグイネヴィアは小さくつぶやいた。

この時、グイネヴィアは初めて得体のしれない悪意が自分の周りで渦巻き始めるのを肌で感じた。

その後宴会場にて王妃が毒りんごを使って人殺しをした、という噂は宮廷、城内に瞬く間に広がっていき、疑いをかけられたグイネヴィアは必死にそれを否定するしかできなかった。あの時の状況を今になって思い出してみると不審なことがいくつもあった。りんごを配っていた使いの者はいつも見慣れた老女ではなく、若い女だった。それに、先ほどの声はどこかで聞き覚えのあるものだった。しかし、声の主が誰かまでは思い出すことができない。

その後、グイネヴィアは使いの老女を問い詰めてもその若い女については知らないという。

一体あの女は誰だったのか。あの女が私に罪を着せるため毒りんごを配ったのだろうか。とにかく、アーサー王を呼び戻して真相を明らかにしてもらおうほかないのでグイネヴィアは使いの者を走らせ、至急城に戻るように伝言を頼んだ。

## 帰路

いち早く試合場を後にしたランスロットは、負った傷の重さに意識がもうろうとしていた。頭部に受けた傷と切りつけられたわき腹が激しく痛み、逃げ込んだ森の中で馬から崩れ落ちてしまった。遠くに自分の名を呼ぶ声が聞こえた。おそらく行動を共にしていたあの少年だろう。彼は戦いの中でもよく動き無事だったのでほっとした。しかし、意識を保つのに精いっぱい返事をするのができなかった。——そこで彼の意識は途絶えた。

「ランスロット様、どうか起きてください。」と少女の声がする。しかしそれがどこからくるものなのかがランスロットには分からない。目を開けることはできず、ただ頭の中で声が響いていた。

「あなたにはまだやるべきことがあるはずですよ。死んではなりません。」

君は、一体だれなんだ、と声に出そうとするも上手く口から出てこない。しかし、思いを念じるだけで伝わるようではばらくの間があり声は答えた。

「……残念ながらそれは言うことができません。しかしそれはいずれ分かるでしょう。」

すると声は聞こえなくなった。

目を開けるとそこにはラヴェインが立っていた。

「湖の騎士様、目を覚まされたのですね！ よかった、本当によかった。」と涙を流しながら言っている。

「一体どれくらい眠っていたのだろう。」

「丸二日ほどです、一時はもう駄目かとさえ思いました。けれどあなたの強い生命力のなせる業ですよ。」と少年は嬉しいとも悲しいともどれる涙をみせた。

「騎士はこれくらいのことです泣くものではないぞ。」とランスロットはたしなめた。

「そうですね。すみません。」あわてて涙をぬぐうと戦闘でぼろぼろになった武具をとりかえるように言い、着替えをとりだした。みると屋敷に置いてきた行きでの装備だった。

「わざわざ、取りに行ってくれたのか。すまないな。」礼を言うとさっそく着替えた。

一体夢の中で聞こえた声は何だったのだろうか。それだけが気がかりだったが愛するグィネヴィアのもとへ帰れると思うとすこしだけ希望が湧いてくるのを感じた。

「もう私に恐れることは何もない。アーサー王よ、直接私の本心を打ち明けよう。」と言うとランスロットは立ち上がり痛む傷口を押さえて馬に跨った。

「だめです。まだ安静にしていなくては！」と少年は止めようとした。

「ラヴェインよ。君を我が忠誠を誓うアーサー王に紹介したい。このような場所ですつまでも留まるわけにはいかない。一緒に城まで来てくれるか。」

少年は一瞬ためらったのち、騎士をまっすぐに見上げた。

「……もちろんです。あなたの行く所ならどこまでもついていきます。」

こうして心強い供と一緒に城への帰路を急ぐのであった。

森を出発してから二日ほどかけてランスロットはラヴェインと共にキャメロット城へ到着しようとしていた。

「あれが、キャメロット城ですか。」と少年は指をさして言う。

「そうだ、あそこにアーサー王が待っている。」そして、愛するグィネヴィアも。

## 王の帰還

試合場からキャメロットへと戻る途中、妻のグィネヴィアが殺人の疑いをかけられていることを使いの者を通して聞いたアーサーは慌てて自軍を引き連れ宮廷へと戻った。

「グィネヴィア！」宮廷に入り、大声でアーサーは妻を呼び寄せた。

「帰りを待ちわびていましたわ。アーサー！」

「一体、どうなっているんだ。よもや君が殺人など犯すはずはないだろう。」

「もちろんです。私も、何がどうなっているのやら分かりません。」といいグィネヴィアはベッドに伏せてしまった。

「おそらく、君の仕業に仕立てあげようとした者がいるはずだ。誰か心当たりはないか？」

「いいえ、この催しは以前から決まっていたことですし集まった者たちに疑わしい者などいないように思えます。」

アーサーは自分の不在を心から嘆いた。遠征からもう少し早く帰っていればこの事態を防げたかもしれないと自分を強く責めた。

「このままでは、君を罪人として裁かなくてはならない。おそらく死罪は免れないだろう。」

「私がやっていないということだけは一番私がかかっております。けれど、何者かの恨みを買うような事をしたのも事実でしょう。……ならばその罪を甘んじてお受けするつもりです。」

グィネヴィアは死を覚悟しているようだった。

「それだけは何としても避けねばなるまい。」

「一つだけ気になることがあります。騒ぎが起きてから使いの姿をした若い女がどこにも見当たらないのです。」グィネヴィアは唯一気になっていたことをアーサーに告げた。

「その者をすぐに探すしか、君の身の潔白を証明する手立てはないな。」

そう言うとともに数名の騎士を呼び寄せ、捜索にあたらせた。

## 罪

城下の町に着くと、ランスロットは様子がいつもと違ってすることに気づいた。何かあったのかもしれない。いち早くラヴェインに村の者に話を聞きに行かせた。するとあわてて戻ってきてこう言った。

「大変です！ 先日行われた宴会で王妃グィネヴィアが毒りんで殺人を犯したという疑いがかけられているようです。しかも、今晚中にもその罪状が言い渡されるそうです。騎士様、どうしますか？」

「私のいないうちに大変なことが起きていたのか。とにかく、直接会って話を聞いてみないことには何もできない。君はここに残って他の者にも話を聞いておいてくれない

か。」と言いつ残し城の中へ慌てて入っていった。

すると城の中へ駆け込んでいったランスロットの目の前にあらわれたのは、一人の若く美しい少女だった。白い衣装に身を包み、宮廷の使いの者のようにも見えた。

「騎士様、あなたが来るのをずっとお待ちしていました。」少女は言った。

「……君は、一体？」そう言ったランスロットは不思議と見ず知らずの少女にどこかで会ったことのあるような感じを覚えていた。

「私に名前などはありません。けれど、あなたを想う気持ちはあります。しかしわたしはとんでもない過ちを犯してしまったのです。そしてその罪を償わなくてはならない。」

少女の発する言葉をただ聞いていることしかできないランスロットだったが、彼女の話す言葉の一つ一つに切実な思いが込められているように感じていた。

「あなたを想うが故に犯した過ちです。しかしあなたは何も悪くない。悪いのはすべてわたしなのです。悪魔のような声に惑わされてしまったわたし。けれど今あなたにこうして会えた。あなたならきつと分かってくれると思います。ここでずっと待っていました。」

「名もなき美しき娘よ。どんな些細な罪でもかならず人は誠意をもって償わなくてはならないのだ。これだけは言わせてほしい。あなたがどのような罪を犯したのか私は知る由もないが、罪あるところに必ず罰がある。それに君の想いには残念ながら答えるこ

とができないようだ。私の愛する者は一人で十分だ。」

「……そうですか。あなたはわたしの最後の希望でした。しかし今となってはもう遅すぎたのですね。あなたを一目見ることが叶ったそれだけで満足です。ありがとう。」

少女はそう言い残し去っていった。最後に名をその背中に聞くと「……それはいづれ分かるでしょう。」というか細い声だけが返ってきた。

ランスロットはただ、そこに立ちつくすことしかできなかった。

## 事件

朝から雨雲が低く立ちこめ、嵐の気配があった。ランスロットは何としてでもグイネヴィアの身の潔白を証明しようとラヴェインと共に動きまわっていたが、ついに王妃に言い渡された火刑が実行される日になってしまった。

唯一の手掛かりは、毒りんごの騒ぎの中、城に戻ったランスロットの目の前に現れた一人の少女だろう。

彼女の行方があれからつかめずに途方に暮れていた。

日が沈み、雨風がびたりと止んだのでラヴェインに宮廷の外の様子を見に行かせてみ

た。

すると、どこからともなく女の歌声がする。透き通った悲しげな歌声だ。

そして、人々のざわめきが始めた。

ふと外の様子が急に気になり、胸騒ぎがしたのでランスロットは城内に川の流れ込む波止場に人が集まっているのを確認し、近づいた。またもう一人この場に近づいてくる者がいた。アーサーである。

周りの者は自分とアーサーの姿を見ると、驚きながら一歩後退して一本の道が目の前に開けた。

その道の先にあったのは、一艘の小舟である。

そして、その中には色鮮やかな深紅の衣装を身にまとった少女が一人横たわっていた。少女はすでに息はしておらず、全身血の気が引いていて蒼ざめてしまっていた。

さらに近づくとランスロットははっと気付いた。数日間いくら探しても見つからなかったあの使いの格好をした若い少女ではないか。

「なぜ、こんなことが……」思わず、ランスロットはつぶやいてしまった。

「なんとという不幸か……」アーサーは後ろで様子をじっと黙ったまま見ている。

状況を察し始めた周りの騎士たちが恐怖から十字を切りはじめると、ランスロットは少女の胸の上に組まれた指の間に手紙がはさまれていることに気づいた。

手紙を開き、内容を確認すると次のような文面であった。

「ランスロット様、これは愛する貴方への最初で最後のわたしからの手紙です。あなたに想うひとがいることを知りながら、わたしはあなたを愛することを止められなかった。あなたに会えない日々もそれまでの退屈な日常に比べたら何倍も刺激に満ちあふれたものでした。疑いをかけられているグィネヴィア王妃の身の潔白を証明するにはわたしが犠牲になるほかなかったのです。あなたを愛するが故に名も言わず、去っていくわたしをどうかゆるしてください。わたしは最後まで純潔な処女のまま死んでいきます。できることならこの想いを直接あなたに届けたかった。それだけが心残りです。これが最初で最後のお願いです。小舟のへさきに刻まれた文字、そしてわたしのこの無念を詩にして後世に語り継いでいってもらいたいです。このような不幸を二度とおこさないために。さようなら。」

読み終えるとそのまま小舟のへさきに目をやった。

そして、しばし瞑想しつぶやいた。

「……神よ、今は亡き美しき少女の御霊に慈悲を垂れたまえ、『シャロットの姫君』に。」  
ランスロットは涙を流し、美しき『シャロットの女』の冥福を祈った。

## 真実

事件の翌日、ランスロットとアーサー王は今亡き『シャロットの女』の埋葬にとりかかった。異例の事であったが王妃の潔白を証明する手紙を残していったものへのせめてもの償いになればいいと思ったからである。

葬儀が行われるなかランスロットが唯一気がかりだったのは、ラヴェインが昨日、外の様子を見に行ったり姿を見せないことだった。

数日経ち、宮廷にいたランスロットのもとに一通の手紙が届いた。みると行方が分からなくなっていたラヴェインからである。手紙を開き、読み進めていくと事件がまだ終わっていないことを知った。

『シャロットの女』の正体は槍試合の道中宿泊した屋敷の娘だったのだ。つまりはラヴェインの妹ということになる。波止場で自らの妹が死体になって小舟で運ばれてきた姿を見て慌てて屋敷に戻ると、兄あての書き置きがあったという。それを読んだラヴェインは宮廷に迫る陰謀があることを知らせてくれたのであった。

ランスロットは手紙をふところに大事にしまい、こうつぶやいた。

「私にはまだやるべきことがある。いち早く手を打たなくては……」

命をかけて愛された者の使命を強く感じ、ランスロットは宮廷を後にした。

馬に跨るその背中には、装飾された深紅の楯がきらめいていた。



退屈な日常

この日もいつもと変わらない一日として終わるはずだった。家族との退屈な会話。刺激のない日常。平凡な風景。そのどれもが本当のわたしとは不釣り合いのように思えて仕方がない。

「今日も、一日何も起こらなかったわ。なんて退屈なの……」と眠りにつく前、目を閉じて口癖のように言ってしまうほどだ。

しかし、この日だけは違った。ある晩、老父が応対して家に招き入れた憧れの騎士様との出会いがあったからである。出会いといっても、若い女であるわたしと直接に会わせるわけにはいかないという父の言いつけがあったので目と目を合わせた出会いではないけれど、近くに刺激的なおいを感じられたのである。老父や兄との会話を壁越しに聞いていると、これから北方の地で開かれる馬上槍試合に出場するらしい。

わたしは話を聞いているだけで騎士様への思いが想いに変わり、果てには愛情を感じるまでになっていた。

夜中になり、兄と老父が寝たのを見計らって騎士様のいる部屋の前まで来た。

ドアの向こうから聞こえる憧れの存在の息づかいがわたしの鼓動を早くした。この人ならわたしの退屈でありふれた日常を、きっと刺激で満ちたものに変えてくれるはず。

何か、自分にできることはないかと考えた。そしてしばらく考えた結果、出た答えは得意の裁縫で騎士様の武具を派手にしてしまうということだった。わたしが装飾した武具を身につけて戦う姿。想像するだけで胸がいっぱいになった。

退屈なときはいつも織り続けていた糸を使ってさっそく楯に色鮮やかな深紅の刺繍の装飾を施すことにした。作業は一晚中かかり、出来上がったものを老父の部屋に運んだ。老父には騎士様にこれを使ってもらうよう説得してほしいと書置きを残しておいた。

空に明るみが出てきた早朝、騎士様はもう出発するようだった。そこに兄上と一緒に連れて行ってほしい旨を再度告げ、老父が頼みこむと騎士様はこれを了解した。このときばかりは自分が女に生まれたことを半ば呪ったが願い通りに老父のはからいで屋敷の前からあった、使われていない古い装備一式を譲ることになり満足だった。

自分の思いが込められた深紅の楯を使い戦場で駆け回る姿を想像するだけで震えるよ

うだった。

こうして騎士様はわたしのもとから去っていった。

秋も終りになり冬の足音が近づいてきた頃、わたしはそれまで退屈だった日常が全く別のとても刺激的なものに変わっていくのを感じていた。それもすべてはあの騎士様が突然わたしの目の前に現れたから。

今までに経験したことのないくらい運命的な何かを感じさせる出会いだった。わたしと彼はきつと結ばれる運命にあるんだと確信していた。

しかしその彼はあつという間にわたしのもとから去って行ってしまった。その後、彼の話を聞くことはなく槍試合で何か起きたのではないかと思うようになった。それからというもの食事をするときも、洗濯をするときも四六時中彼の事ばかり考えている。彼を想うことが生活の一部になってしまったと言っていていくらいである。

——彼はわたしの心を一瞬にして魅了した罪深くそして憧れの存在なのだ。

名を聞いても答えてはくれなかったけれど、あとで老父があの方の正体を教えて下さった。あの方は勇猛果敢なことでよく知られた伝説の騎士ランスロット卿であった。わたしの憧れの存在が伝説の騎士だなんて神は退屈な日常に嫌気がさしながらも我慢し

て過ごしていたわたしへのご褒美をくださったのだわ。

でも一体、なぜ彼は名乗らなかったのだろう。なにか名前を言えない事情があるのだろうか。

そうやっていつもあの騎士の事ばかり思い巡らす日々だった。

ある日、屋敷に來客があった。みると騎士の格好をしていたので一瞬、ランスロット様が戻ってきてくれたかと思ったが違うようだった。いつものように老父が応対すると私に用があるのだという。しぶしぶ老父はわたしと面会することを許してくれた。

「はじめまして。あなたに会いにキャメロットからやってきました。」とその騎士はほほ笑みながら言った。

「えっと、どなたでしょうか。」私は恐る恐る尋ねた。

「名乗るほどの者ではありません。王に忠誠を誓う者です。あなたはランスロット卿をご存知ですよね。」

わたしは思わずランスロットという言葉に反応してしまった。

「え、あのランスロット様ですか？ ……もしかして彼の身に何かあったのですか？」  
馬上槍試合に行くといい、去っていった彼に何か重大なことが起きたのではないかと心配していた気持ちがつい口からこぼれてしまった。

「居場所まではわかりませんが、おそらく無事です。それより、あなたの兄上から伺っ

たのですがランスロット卿はこの場所を訪れているそうですね。」

「はい、先日のことです。槍試合にいく途中に立ち寄って一泊されてすぐに出て行かれました。名前を名乗ることはなかったのですがランスロット様に間違いありません。」

「もしかして、彼の装備がここにまだ置かれていますか？」

「はい、彼がこの場所に取りに戻ってくるまで大事に保管しています。」

「わかりました。ところで、なぜランスロット卿は名乗らなかったのでしょうか？」

「え、どういうことですか？」

「名乗れない事情が彼にはあったのです。」

そういうと彼はアーサー王と王妃グィネヴィアの関係がうまくいっていないこと。そしてその原因がランスロット様と王妃の間にあるただならぬ恋愛感情にあることなど宮廷の置かれている状況を伝えてくれた。

「そんな事情があったのですか。」

「このままでは、あなたの想いはずっと実ることはないですよ。それでも彼が振り返るのを待ち続けますか？」

「一休わたしはどうすればいいの？」とわたしははやる気持ちを抑えて言った。

「そこで、あなたに提案があります。これはあなたにしかできない大仕事なのです。

あなたは宮廷の救世主になるでしょう。」と言った謎の男の顔は怪しく歪んでいた。

## 過ち

いつもならこんな話には乗るはずがない。しかし、目の前にわたしを必要としてくれる人がいて、それが愛するランスロット様へと通ずるものだと知った今、もうこの気持ちを抑える術を知らないわたしはただその提案を受け入れる他なかった。

気がつけばわたしはキャメロット城の宮廷で開かれる宴会場にいた。わたしとは住む世界のまったく異なる人たちが呑気にただ会話を楽しんでいる様子が見ているだけでいらだたしかった。その場にも言いようのない疎外感をただ感じるしかなかったからだ。「それもみんな、あの女がいるから。」と強く念じながらただひたすらその時を待った。

王妃がわたしに声をかけ、皆にりんごを配るように言った。

わたしはりんごの入ったかごを取り出し、集まった人々に一つずつ配りまわった。もちろん王妃にも一つ手渡した。王妃はりんごを手にとると一口かじった。皆もそれに合わせて一口かじる。

すると全く予想していなかったことが起きたのである。りんごを食べた者のうち一人

の男が喉を押さえうめき声を出し始めたのである。そしてしまいには動かなくなってしまうた。

最初、一体何が起きたのか分からなかったのだが、あの倒れて動かなくなった男の食べたりんごに毒が入っていたようだった。わたしはなんてことをしてしまったのだろう。このままでは人殺しだ。それに私に疑いの目が向けられてしまう。そう思っすぐこの場を立ち去ろうとした。すると「王妃が、人殺しをしたぞ！」という声が聞こえた。見ると、私の家にやってきたあの騎士ではないか。なぜ、この場所に？　このときようやく悟った。

——ああ、わたしはあの男にたまされたのだ。

ここに私を呼び寄せ、使いに変装させたのも全てはこのためだったのか。そのことに気づいた私は放心状態のまま会場を後にした。

城の人たちは皆口々に、王妃がりんごで男を毒殺したことをうわさしていた。本当は仕組まれたことだというのに。だが、いくらわたしが事実を口にしたところで誰も信じてはくれないだろう。田舎から出てきた娘のたわごとだと思われるに違いない。しかし、一つだけ希望があった。ランスロット様である。彼ならわたしの言うことを絶対に信用してくれるはずなのだ。

そう思い、宮廷で隠れて最愛の騎士の帰りを待っていた。

## 別れ

もうすぐあの方はここに来るとい確信に近い思いで宮廷の中に潜みじっと待っていた。

すると慌てた様子で駆け込んでくる大柄な体躯の騎士。間違いない、夢にまで見た憧れの騎士、ランスロット様だ。わたしは彼を呼びとめた。彼への想いを全て打ち明けようと決心していたのである。

もう過ぎ去ってしまった時間は元に戻すことができないけれど、わたしは後悔していない。だってこうして憧れの存在であるランスロット様と直接会って話すことができるのだから。今この瞬間、あなたはわたしのことだけを考え、想ってくれているはず。それが何より望んでいたことだから。

しかし、彼の言葉はわたしの期待を裏切り、過ちを責めるものであった。じっと黙って彼の言葉を聞いていた。するとなぜか気持ち軽くなっていくのを感じた。たとえ一

方通行の愛情だとしてもそれでもいいじゃないか。こんなに刺激的な毎日を過ごさせてくれた彼は十分わたしの気持ちにこたえてくれた。この姿で会うことはこれから先ないのかと思うときみしい気持ちもあるが、いずれまた会うことができる。不思議とそんな気がするのだ。

嘘偽りのない想いを彼に全て伝えると、わたしは彼に背を向けた。もう振り返ってはならない。後ろから名を問う声が聞こえるがわたしは「……それはいづれ分かるでしょう。」とだけ言って去った。

——まだわたしには最後にやるべきことが残されている。

城を出て、屋敷に戻り用意していた紙にペンで自分の最期の言葉を綴り始めた。

「これは愛するあなたへの最初で最後の手紙です。」とわたしはぼつりと言った。

## 旅立ち

テムズ川の流れる先にそびえ立つキャメロット城。朝から雨雲が低く垂れこめて空からは激しい雨が大地に降り注いでいた。川の流れるは普段より激しく、雨風で折れた川沿いの柳の枝をも遠くへ運んでいる。この流れに乗って流れるものは枝だけではない。一

艘の小舟も川の流れに身を任せて荒れる水面を漂っていた。わたしは小舟の中に置かれた台に横たわっている。

降りしきる雨に打たれながら川を流れていく様は他の人の目にはたしてどう映るのだろうか。そんなことを考えてみるも、それが意味をなさないことに気づく。

しばらくすると、さっきまでの嵐が嘘のように静まった。

——もうすぐ目的地に着くのだ。わたしは直感した。

約束の場所に着くまで少し時間があるから、少し歌うことにした。

この歌は、あの方に届いているのだろうか、と心配になったがきつと届いているはずだ。そう強く思いながら歌うことを続けた。

すると月明かりがわたしの身につける深紅の衣装を照らしはじめた。わたしの想いが歌にのって届いたからかもしれない。もうすぐわたしはわたしでなくなるけれど、大丈夫。だって私の想いはずっと残り続けるから。永遠にあなたの心で生き続けることができるから。

「死とは、命が尽き果てて呼吸をしなくなることではない。死とは、誰からも相手にされず忘れ去られること。」

それを教えてくれたのは、他でもないランスロット様、あなたです。だから私は死を恐れない。

悲しげで聖なる歌声はだんだんとか細くなっていき、ついには誰の耳にもきこえなくなってしまうた。

ちようどそれは、小舟がキャメロット城の水門にさしかかる頃であった。

終わり

アーサー王研究会創作文庫

『シャロットの女』殺人事件

著者 佐藤雄紀

2011年 1月 7日 発行

発行人 不破有理

発行所 慶應義塾大学 アーサー王研究会

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1

慶應義塾大学来往舎1階 代表 045-563-1151

©2011 SATO, YUKI Printed in Japan

非売品